

# 天草で〈周縁〉を考える

～フィールドワークの余韻～

藪 田 貫

## 1. 風土病

昨年7月26日～30日の天草でのフィールドワークは、昔の記憶を呼び起こしてくれた。天草市に1泊して2日目に、市内中央の丘に立つ天草キリシタン館を訪れたが、その時、懐かしさとともに著しい違和感が生じたのである。懐かしさは、40年近く前にひとり、キリシタンの地を追体験したく、貧乏学生としてこの地に来たことがあるという記憶に起因する。船で渡ったという記憶はないので、天草五橋が開通した昭和41年（1966）9月以後であることは間違いない。現在、殉教公園と名付けられている丘の上から見た青い海、小さな大黒天の裏に刻まれた十字架、わたしのほかには誰もいない木造の資料館といった思い出がおぼろげながら脳裏に浮かぶ。反面、目の前にはガラス張りの立派な建物と、明るい展示室に団体の観光客。二十歳代の青二才が、あの時感じた陰鬱な雰囲気は一体、どこへ行ってしまったんだ……しばらくの間、新旧二つの感覚はわたしの身体の中でぶつかり合っていた。

こうした座り心地の悪い想いを抱きながらフィールドワークは始まり、翌日には、富岡へと移動することとなった。ここは初めてである。真っ白なキャンバスが用意されている。好きなだけ、印象を描くことができると思いきや、イの一番に受けた印象は、予想だにしないものだった。それを説明するには少しばかり、わたしの個人的な事情を述べる必要がある。

わたしは二泊以上の宿泊をとまなう出張には、必ずジョギングの用意をする。三十年来の習慣である。ジョギング用の靴と上下のウェアをスーツケースに入れるのである。はたして富岡でも、3日目の早朝、待ちに待ったジョギングに出かけた。空には厚い雲がかかっているが、昨夜来の雨はすでに止んでいる。この時を逃す手はない。走るコースは地図で一応確かめて、念のため地図をポケットに入れてある。用意万端、イザ行かんと、宿舎のホテルから海岸線を東に走り始めた。順調に走り始め、富岡の市街をほぼ走り尽くし、志岐の入口で折り返し、宿舎に帰る途次、富岡神社に参拝しようとした。その時、瑞林寺の境内を抜け、近道しようと思いつき、寺の山門をくぐり進むも、山道を間違えたと気づき、踵を返したその瞬間、前夜の雨で濡れた石畳で足を滑らせて右に横転した。とっさに右肘で身体をかばったが、その所為で右肘を強打、擦り傷からは出血、肘は内出血で腫れてきた。これはヤバイ！と、山門を出て、ホテルへの道を急いだのはいうまでもない（写真1 ホテル四季咲館）。

部屋に戻り、水で洗い流してタオルで出血を防いだが、とても応急処置で間に合う怪我ではない。朝食もとらず、午前の調査をキャンセルしてもらい、ホテルの車で荅北医師会病院に連れて行ってもらった。待合には、朝一番で来ている老人ばかり。



写真1 ホテル四季咲館

自宅に電話で連絡し、ワイフにファックスで保険証を送ってもらい、待つこと30分。傷の手当の後、外科の担当医の診察となったが、驚いたのはその時である。「予防注射をしましょう」というのではないか!? 転んで怪我をしたのになんの予防注射か、わたしにはまったく理解できなかったが、担当医の説明は「風土病の予防注射です。ここは昔、風土病があったんです。近年、ほとんど症例はありませんが、予防注射をしておいたほうがいいでしょう」とのことであった。アフリカに行くならともかく、日本の天草で今時、風土病の予防注射を受けるとは……

転んで打撲傷をうけたキズよりも、自分が風土病の予防注射を受けるという現実のほうが、はるかに強烈な体験であった。ただし、予防注射は三週間後にもう一度、受けないといけないということで、担当医は丁寧に診断書を書いてくれた。ところが当のわたしは、その時八月中旬にはベルギーにいる予定で、飛行機も宿舎も予約済みである。したがって医師の好意溢れる診断書は使われず、苓北医師会病院の診察券とともに、いまわたしの机の引き出しに眠っている（幸い風土病は発症しなかった）。

キリシタンの里として認識していた天草の地に、つい先ごろまで風土病があった。この事実は、帰阪後、インターネットで調べてみると確かであった。「天草島に於ける肺吸虫症の研究」という論文が、『長崎大学風土病研究紀要』に載っていたのである。肺吸虫症とは、サワカニやモクズカニが感染媒体となって伝染する肺の病気である。1960年（昭和35）の発刊であるから、40年以上も前の症例である。たしかに、濡れた庭石に感染媒体がないとも限らない。苓北医師会病院の医師は、そんな記憶をもとにわたしに予防注射を勧めてくれたのである。

ジョギング中に転んで怪我をしていなければ、天草の風土病を、永遠にわたしは知らないでいただろう。転んで怪我をすることで、天草という地域の周縁性を知ることができたのは、「痛い」収穫であった。

## 2. 西海地域とキリスト教

周縁プロジェクトとして天草を選んだのは、もちろん天草諸島の〈周縁性〉にあるが、その周縁性は同時に〈境界性〉でもある。通常見慣れた世界地図を反転させ、赤道を上、北極を下におくと日本列島が逆立ちするばかりか、面白い視点がつぎつぎと発見される。「南高北低図」（図2）を眺めていると、日本海が文字通り環日本海として、まるで日本とロシア・中国・南北朝鮮に囲まれた内海であることが理解される。故網野善彦氏が、『日本とは何か』（講談社、2000年）の巻頭で提示したイメージである。いまひとつの視点は、赤道付近から北上（この場合、北に下がる）して台湾海峡を通過すれば、船舶は一路、九州の西海岸に至ることが見通せることである。蒸気船以前の帆船である限り、東南の風は、船を九州沿岸へと運ぶ。例外は、南西諸島の間を抜けた場合で、その時は、黒潮に流され、運がよければ日本の太平洋沿岸に漂着するか、さもなければ太平洋上の藻屑と消えることとなる。漂着唐船に注目して、その関連資料の収集を提案した故大庭脩氏の発案は、資料集の刊行を通じて前者、つまり太平洋沿岸に漂着する中国船の多さを証明することとなった。

だがそれは例外、もしくは想定外で、本来の想定は、鹿児島島の坊津に漂着した鑑真和上や、鹿児島に辿りついた宣教師ザビエルのように九州の西海岸に辿りつくものであった。それは個人の意思を超えた、いわば地球の必然の力であった。

その力に誘引され、日本の国外から、さまざまは人びとがやってきた。アジアからもヨーロッパからも。その結果、九州の西海岸は、〈境界性〉を歴史的に持つようになった。「西海地域」という地域呼称は、このような境界性を表現するのにふさわしい。したがって今回の天草でのフィールドワークは、言葉を変えれば、西海地域でのフィールドワークということもできるが、その西海地域には、わたしの個人的想いがある。

近年わたしは、今回のフィールドワークとは別に、個人的に西海地域で調査旅行を続けている。その初めは、2008年2月末の長崎市街と外海地区の調査、ついで同年9月の島原半島調査、2010年2月初旬の平戸・生月調査と続き、2010年7月の天草調査があるという経緯である。その間、2009年4月～9月には、半年のベルギー暮らしを経験し、その滞在中にポルトガルに出かけたが、これも西海地域調査に関連する。



図2 「南高北低図」



図3 天草灘と五島灘

なぜならエンリコ航海王の遠征以後、ポルトガルは東へ東へと進出し、16世紀中葉、ついに西海地域に辿りついたからである。いわば北半球の裏側から、西海地域を旅していた勘定になる。

こう書けばわかるように、現在のわたしの西海地域へのこだわりは、キリスト教にある。境界性を強く持つ西海地域におけるキリスト教が、わたしのテーマである。キリスト教で西海地域を横断的に切ってみたい、と言い換えることもできる。その発端は2007年1月、史跡指定で10年近く関わっている文化庁の進める世界遺産暫定リストに、「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」が追加されたことにある。20の構成資産は、大浦天主堂のある長崎をはじめ、ド・ロ神父ゆかりの外海、平戸と生月島、原城跡の島原半島、6つの教会群が点在する上・下五島と小値賀島に広がっているが、地図で確認すれば遺産群は、五島灘を取り囲むように所在している(図3天草灘と五島灘)。キリスト教と信者が、相互に船で往来していたことが背景にある。天草灘と五島灘は海続きである。ならば、その交流圏に天草諸島が組み入れられているのはいうまでもない。天草をキリスト教という視点で、再度、見てみたいという思いが、今回のフィールドワークへの大きな期待であった。

また「西海地域とキリスト教」というテーマは、東アジアの文化交渉へのわたしなりの視点の転換でもある。なぜなら大庭脩先生との生前、最後の仕事となった『長崎唐館図集成』(2003年11月)の発刊後、発想を変えてみたいと思うようになったからである。具体的には、①視点を都市長崎から周辺に拡散してみたいと考えるようになったこと、また②日中関係というコードから外れてみたいと思うようになったことが理由としてある。「西海地域とキリスト教」というテーマは、この発想にうってつけであり、そのきっかけが「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の暫定リスト入りによって与えられたといえるだろう。

### 3. 「五足の靴」と鈴木三公像

「西海地域とキリスト教」という関心から見たとき、天草は期待にたがわぬ魅力を持っていた。本渡のキリシタン館はもちろんだが、天草下島の西海岸にそって立地する大江天主堂・崎津天主堂の美しい姿、天草ロザリオ館とコレジヨ館の優れた展示品は申し分のない素晴らしさであった。とくに大江天主堂が山の中腹に海を見下ろして立ち、崎津天主堂は海のすぐ傍に、まるでそのまま船にでも乗れそうな感じで立つ、そのコントラストは印象深いものだった（崎津の漁村景観は2010年11月、国の重要的文化的景観に選定された。『月刊文化財』平成23年2月号参照）。今後、長崎県と熊本県という県境を越えて、「教会群とキリスト教関連遺産」という名の下に、共同で世界遺産への取り組みが進むことを願わずにおれない。

とくに天草のキリスト教関連遺産の場合、「五足の靴」という記念的文学のあることが重要である。「五足の靴」とは、明治40年（1907）夏、与謝野鉄幹（35歳）をリーダーに、北原白秋23歳、吉井勇22歳、平野万里23歳、太田正雄（木下空太郎23歳）の新詩社同人五人が長崎から天草灘を超え、富岡を經由して大江・崎津に至る紀行文である。紀行文は『東京二六新聞』に発表され、白秋は42年（1909）、『邪宗門』を出す。また太田正雄は『日本吉利支丹史鈔』や『日本遣欧使者記』など、本格的な日欧交流史に進んでいる。日本の近代化の最中に、16世紀後半のキリスト教を通じた日欧交流史が回想されていったのである。

この流れは、第二次世界大戦後、地元天草に波及する。昭和27年（1952）5月27日、大江教会堂の傍に、同人五人のうち存命であった吉井勇の歌碑「白秋とともに泊まりし天草の大江の宿は伴天連の宿」が、大江村青年団の手で建てられたのである。さらに昭和42年4月には、開館したばかりの天草キリシタン館前庭に、北原白秋の邪宗門詩碑が建てられた。こうして「五足の靴」は、天草のキリシタンを語る代名詞となっていったが、興味深いのは、戦後、「五足の靴」を『パンの会』（昭和24年）に紹介し、さらに『九州文学散歩』（昭和27年）でいち早くその行程を辿ったのは、文芸評論家の野田宇太郎という〈中央〉の人物であることである。ガルニエ神父を訪ね、「五足の靴」を書いたのが〈中央〉の青年詩人たちであるとすれば、戦後、その作品を発掘し、文学的意義を説いたのも〈中央〉の文芸評論家である。

『五足の靴と熊本・天草』（1983年）によれば、著者濱名志松氏は昭和27年12月、大江村で直接、野田宇太郎と会って話を聞いている。その後、濱名志松氏ら地元の人々の尽力もあり、「五足の靴」は天草を語るキーワードとなっている。天草市発行のガイドブックによれば、下田北から下田南への道は「五足の靴文学散歩道」として整備されているそうである。

「五足の靴」は、周縁は〈周縁〉として語るよりは、〈中央〉を介して発信するということ为例示しているように思える。

ところで「西海地域とキリスト教」は、教会群や「五足の靴」とまったく異なった記憶を天草の各地に残している。今回の調査を通じてわたしはそれに、もっとも強く印象づけられた。それとは、鈴木重成代官に関わる記憶と文化遺産である。誤解を怖れずにいえば、「西海地域とキリスト教」を象徴する天草の一方の極が、本渡の殉教公園であるとすれば、他方の極は市内中心部に立つ鈴木三公像ではないだろうか（図4 鈴木三公像）。メダルの表と裏のような両者の関係は、苓北町でも、富岡吉利支丹供養碑



図4 鈴木三公像

(千人塚)と鈴木重成供養碑にみることができる。このことは、「西海地域とキリスト教」には、表と裏があることを意味する。

鈴木重成とは、天草・島原の乱(西海の乱)の壊滅後の寛永18年(1641)11月、幕府領となった天草支配のために赴任した代官であるが、兄正三和尚を招き、新たな宗教政策を実施し、その後、正三和尚の子重辰が第二代代官となったために、「鈴木三公」として語られる。彼らに共通するのは、天草・島原の乱(西海の乱)の壊滅後の「天草の復興」である。本渡の大通りに立つ三公像は、平成19年の建立という新しいものだが、「350年の時空をへて」と題して、つぎの一節が書かれている。

島民は忘れない 天草の乱で崩壊した この島を身をもって  
立て直してくれた 鈴木三公のことを

この一節には、天草・島原の乱(西海の乱)が、地域社会の解体をもたらしたという意味合いが込められている。多数の犠牲者はもちろん、宗教と習慣の対立、人心の荒廃、産業基盤の崩壊などとして、地域社会に甚大な影響を与えたのである。阪神・淡路大震災のように自然災害からの復興ではなく、天草・島原の乱(西海の乱)という〈人災〉からの復興が、鈴木重成代官と兄正三和尚の下で進められた。それは島原においても同様であったろうが、天草には、鈴木兄弟を顕彰するという顕著な動きがあった。その表れは現在、顕彰碑や銅像、鈴木神社、国照寺などに見ることができるが、その一端を、天草アーカイブズで行なった地域新聞調査で垣間見ることができた。

わたしたちが閲覧したのは、『みくに新聞』(昭和11年)、『天草新聞』(昭和28年)、『天草民報』『天草毎日新聞』(ともに昭和38年)であるが、昭和28年には離島振興法の公布をめぐる記事が目立ったが、38年には鈴木重成像の建立の動きや、彼の命日を祝う祭祀などの記事が注意を引いた。天草市発行の観光

パンフレットによれば、天草島内には今も、33カ所の鈴木塚があるそうだが、それらがどのようにして築かれてきたかは、一つの課題であろう。詳細は、今後の報告に委ねたいが、天草において「西海地域とキリスト教」は、「五足の靴」とともに「鈴木神社」「鈴木塚」を生み出していたことを知ったのは大いなる収穫であった。

「五足の靴」をメダルの〈表〉とすれば、「鈴木神社」は〈裏〉だが、その反対もありうる。わたしたちが「五足の靴」ほどには、鈴木神社や鈴木三公像を知らないとすれば、そこには〈中央〉が介在していないからではないだろうか。だとすれば天草には〈周縁〉として、〈中央〉を介さない強烈な記憶がある。

#### 4. 祭り

7日間のフィールドワークは、長崎で幕を下したが、参加した院生の評判は一様によかった。院生の口から直接、耳にしたが、その要因は、天草では、複数のテーマで調査することが可能だったからだと思う。a地理、b寺院と神社、c生業、dキリシタン、e古文書と五つのチームに編成した助教荒武賢一朗氏のプランが適切であったのは言うまでもない。それと同時に天草には、それだけの歴史（文化）遺産がストックとして蓄えられていたのである。その蓄えの大きさを、わたしたちはフィールドワークを通じて知った。

さらにその蓄えには、記念講演を依頼した鶴田文史氏のような郷土の歴史に通じたLocal Philosopherの活躍、ロザリオ館やコレジヨ館、富岡ビジターセンターといった公立施設だけでなく、サンタマリア館や上田資料館のような私立施設の存在、各資料館での優れた展示なども含まれる。このような質と量の両面における歴史遺産の保存と活用があればこそ、海外からの留学生も好印象を受けたのであろう。

ここには地域社会における歴史遺産、文化遺産の重要性が示唆されている。その点で言えば、2市8町の天草市への合併以後の、各地の歴史民俗資料館の行方が気になった。初日に歩いた倉岳町の歴史民俗資料館が念頭にあるが、十分、現役で働ける資料館が、合併にともなう集中態勢で開店休業状態にあったのである。人が地域を離れば離れるほど、地域の歴史遺産の保存と活用の道は途絶える。そんな心配をさせる現状もまた、わたしたちの目にするところであった。

その行方については、現地の方々の叡智に委ねたいが、留学生たちに留意してもらいたいのは、昨年7月末に訪れて見た姿が、すべてではないということである。「限界集落」と称される山村でも、村を出て行った人々と村に残る人びとの絆は結ばれており、その絆は、地域の祭礼において見事に復活する。近隣の都会に出て行った人々が、この時とばかりに帰省し、老若男女揃って祭りを祝う場に、彼ら留学生を立ち合わせてあげたい。そうすれば〈周縁〉とされた地域にも、驚くほどのエネルギーが残っていることを知るだろう。4月の牛深のハイヤでも、8月の本渡のハイヤでも、あるいは12月の大江の冬まつりでもいいが、そんなチャンスが近い将来実現しないものだろうか。わたしの秘かな期待である。

